

本省ヨリ内務省へ送付案

一祖國の國際的立場

三月十日調査部發行ノカ

右陸軍省調査部ニ於テ發行ニ付出版法第四條ニ依リ
製本 貳部送付ス

圖書第四〇〇號

昭和九年三月廿七日



0513

祖國の國際的立場

國防危機の突破は一に國民の組織的結束の強化に存す

昭和九年三月十日
陸軍省軍事調査部

0514

本印刷は昭和九年三月十日陸軍紀念日講演參考資料として配布するものなり。

0516

0919

危機迫る………三三
國民的結束強化の切要………三四

祖國の國際的立場

國防危機の突破は一に國民の組織的結束の強化に存す

要旨

滿洲事變を楔機として世界歴史の切り換へが明かとなつて來た。而して正義に立脚する新なる世界の平和が確立せらるゝや否やは一に新なる動きの軸心に立つ皇國の道義的日夜の精進如何に懸つて居るのである。此意味に於て今後の世界は太平洋時代にあり、其の教導者は聖義日本でなくてはならない。

然るに皇國隣邦の思想及此思想の上に立つ政策は誠に油斷を許さぬものがある。極東の本時局は近き將來に迫りつゝあると見なければならぬ。是れ日本の政略的並に國防的飛躍のみならず、最近に於ける經濟上の著しき飛躍の結果必然的に日本に對して加へらるゝ所の列強の抑壓である。皇國は眞の舉國一致を以て此の試練を乗り切らなければならぬ。

祖國の國際的立場

一

0517

0517

らぬ。之が爲め近代國防の要求に鑑み武力戰、思想政略戰、經濟戰を一元的に統制運用し、萬一の場合に應じ得るの態勢を整へ以て「待つあるを頼む」の域に進まねばならぬ。我れに物心一如の準備完成あつて初めて昭和十、十一年の國防危機線を戦はずして乗り切ることが出来るであらう。日露戰役に於ける赫々たる國威の發揚も將た亦之れに携はれる父祖の偉業も結局する處祖國內外の情勢を確認する日本國民舉國一體的努力を以てのみ之を紹述することが出来るのである。

世界の軸心に立つ聖日本

滿洲事變を楔機として、世界歴史は其歩みを切り換へた。即ち、極東の番犬視されて歐米追隨に終始するかに見えた日本は、眞の大日本帝國に更生して、自主強硬の歩みを始め東亞の盟主たるの行を爲しつゝある。實に白人萬能の世界舊時代史は今や其の終りを告げて、聖義日本を中核とし、軸心とする道義的世界新時代史が展開し始めた。かくして祖國日本は新たなる太平洋時代の世界軸心に立つて、將に世界の聖義高揚に向つて

其の大使命遂行に邁進しつゝあるのだ。世界の聖義高揚とは斷じて皇道を解せざる人々の難する如き武力侵略を意味しない。そは即ち皇道を四海に布くの謂ひ、眞の人種平等と人類の平和とは、聖日本の此の雄躍に待つ所が多いであらう。げに光は東方より來る!! 而も聖日本にとつて此の大使命遂行は十分に可能である!!!

太平洋時代を主導するもの

世界の文明が地中海を舞臺とした間、世界の覇者はギリシヤであり、ローマであつた。世界の文明が大西洋に移つてから、世界の覇者は英國であつた。共に必然の勢と云はねばならぬ。今や世界の檣舞臺は、偶然にも太平洋上に進展した。かくして聖義日本は踞然として世界の軸心に卓立する!! 天の時、地の利、而して人の和、そはローマの地中海に於けるよりも、英國の大西洋に於けるよりも、遙かに遙かに強固である。太平洋時代を主導するものが日本であると云ふことは、正に天地自然の理法であらねばならぬ。

天の時

皇國の國際的立場

注

明治開國以來、日清日露の戦役を段階として、近代文明の上に少年時代、青年時代を經過し來つた日本は、今や滿洲事變を契機として壯年期に躍進したるが如き觀がある。

其の國家的民族的生氣より之を觀るに、彌榮の國性は其の發展正に滿潮期に棹さして止まる處を知らざるの概がある。之を物心將に壯年末期より老年期に入らんとする米國、竝に老年初期に於て没落途上をたどりつゝある英國等に比ぶる場合、干滿隆替の數自ら明かなりと謂ふことが出来る。更に又最近世界の氣勢に處し、日本が致されて已むなく立てる滿洲事變の大雄躍は、皇國の眞價を宇大に明示すべく誠に天の與へし時を擱んだものであつた。此の天の時は大局上皇國使命の遂行に併行して續くものと見てよろしいであらう。天の時は疑ひもなく吾等に在る。

地の利

次に地の利に至つては、世界地圖を一瞥するもの、齊しく首肯し得る所であらう。大八島に國を成すものは、若し大陸に不義あるに方りては直ちに三韓を征することが出来

0521

0521

る。一度三韓を扼するものは大滿洲を制することが出来る。而して古來、滿蒙に國を成すもの、西すれば則ちシベリヤ大陸を横斷して馬蹄に歐洲中原を蹂躪し得ること成吉思汗の如く、南すれば即ち長城を越え支那四百餘州を統べて東亞大陸に君臨し得ること清朝の如く然りである。今、日本の卓立する雄姿を見るに、此三要地を立脚地とするのみならず、遠く南洋管理諸島を併せ抱いて居る。而も太平洋時代の世界大市場は近く對岸の支那大陸に横はる。之を國防上より見るも、之を經濟上より見るも、彼の英國が歐洲大陸に遂に其の立脚地を獲ち得ずして僅かに對岸のベルギーを其の傘下に盟約國たらしめ得たるに過ぎず、而して遠く市場を海洋のかなたに漁り求めたる大西洋時代の地位に比べて、其の差誠に萬々なりと謂はざるを得ない。

人の和

若し夫れ人の和に至つては、我れに千古の傳統あり、機に臨んで舉國鐵石の結束を大成することは大和民族の常綱なり。殊に近年各種メンタルテストの結果が物語る所によ

祖國の國際的立場

五

然ば、日本民族こそは實に世界の最優秀民族であり、而して、東西文化の粹は、今や燦
 然として神州に集り結び、新時代を主導すべき力と光とは將に日出づる國、東海日本よ
 り滿ち發せんとするの觀がある。固より未だ爛熟に至らずと雖、而も新興の勢天地の聖
 氣を積せて、神州より萌え出で來る。之を文明の焼け残りである歐洲に比し、之を物質
 文明の燃え盛り將に衰へそめんとする米大陸に較ぶるとき、吾等は、壯々乎として望み
 に輝ける皇國日本の姿を、太平洋時代の世界軸心に發見するであらふ。

太平洋時代を主導するものは、まがひもなく東海の聖日本でなければならぬ!! そは
 壯年日本に課せられたる對世界負責である。誠に感激と發奮そのものである筈だ!!!

典型的戦争指揮

日本が此の太平洋時代の主導者たるべく、世界の軸心に卓立する爲め、滿洲事變に於
 て爲したる飛躍は、誠に涙ぐましい努力であつた。滿洲及上海に勇奮した武力作戦、之
 と一元的に相應じた世界列強の首都就中ゼネバに於ける政略作戦、並に必勝の信念を以

て遂に未然に防ぎ得た經濟封鎖攻防作戰。日本が擧國一致克く此の三種作戰を概ね一元的に運用し去つて、支那及列強の未だ本格的に立つ能はざるに先つて、早くも防衛的國防戰を積極的に連結し終つたことは、獨逸兵略家が其の當時國防雜誌に評した如く、確かに、近代に於ける典型的戰爭指導であつた。此の典型的戰爭指導の結果として大滿洲國は生み成され、皇國は東亞の盟主たるの行を始めた。而も日本が一對四十二を以て聯盟の議決を一蹴し、敢然として之を離脱し、以て聯盟をして世界聯盟の意義を失はしめたることは誠に世異歴史の切り換であつて、世界史上の一大異彩たるを失はない。

日本の經濟的飛躍

日本は滿洲事變を段階として、政略的竝に國防的に一大飛躍を爲したのみならず、經濟上の努力に於ても近年誠に著しき發展を示して來た。列強不況のドン底にあえぎつゝある間、幸にも日本は禍を轉じて福と成し、爲替安を活用し精勵と克苦とを以て世界貿易市場に一大進出を爲すことが出來た。従つて世界不況の眞只中に於ても、日本の不景

祖國の國際的立場

七

氣は相對的に尙ほ好況を示して居る。今、第一表列強工業生産指數に就て見るも、日本はロシヤを除く爾他列強の首位に在る。就中、日本生産界の大立物たる織物工業の指數に就て見るに、第二表に掲ぐる如く、日本は列強に比して巋然其の頭角を抜いて居るのである。

之を我が國事業活動の全體に就て見るに、事業活動指數はノーマルの指數を一〇〇として、昭和五年平均九四・一、昭和六年平均八七・四、昭和七年平均九〇・一、昭和八年（一月乃至十月）平均九六・六となり堅實なる回復を示して居ることがわかる。

第一表

列強工業生産指數(各種工業綜合)	
年	月
獨逸	米國
佛蘭西	英國
瑞典	日本
ロシヤ	

祖國の國際的立場

考 備	一 九 三 三				一 九 三 二			
	九 月	七 月	五 月	二 月	十 一 月	八 月	五 月	二 月
一九二八年を一〇〇とす	七二・〇	七一・四	六八・九	六四・二	六二・四	五八・五	六二・二	六二・六
	七五・七	九〇・一	七〇・三	五六・八	五八・六	五四・一	五四・一	六二・二
	八六・六	八八・二	八五・八	八一・一	七六・四	七三・二	七四・〇	七八・七
	……	……	九〇・九	八九・九	九〇・〇	八二・七	八九・四	九〇・〇
	八五・六	八三・七	八三・七	八五・六	八二・七	七七・九	八七・五	九一・三
	九八・六	九七・三	九六・三	九五・七	九二・三	八九・七	九〇・八	九〇・八
	……	一九五・五	二〇五・五	二一一・五	二〇四・〇	一九四・二	一九二・八	……
	……	……	……	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	……	……	……	……
	……	……	……	……	……	……	……	……

第二表

一九三二			一九三三				年
七月	五月	二月	十一月	八月	五月	二月	月
九二・二	八六・六	八一・二	八九・七	七四・七	七三・六	八一・七	獨逸
一一二・六	一〇〇・九	七七・六	八六・〇	八四・一	五五・二	八〇・四	米國
七七・八	七一・七	七一・七	六九・七	五九・六	五六・六	五一・五	佛國
六八・七	六六・七	五三・四	五八・二	五七・八	五七・三	五五・八	波蘭
.....	六三・四	六七・三	五八・二	五八・九	七一・七	七五・四	チェッコ
.....	八六・八	八七・七	八六・三	七六・二	八七・〇	九二・二	英國
一一二・六	八六・九	五五・七	一〇三・四	七二・七	一一〇・一	六〇・九	カナダ
一一一・八	一一三・七	一一一・六	一一七・八	一一二・四	一一三・九	一一四・四	日本

列強織物工業生産指數

考 備	三	
	九 月	八 月
一九二八年を一〇〇とす	九四・五	九三・四
	……	一〇六・五
	七九・八	七八・八
	六七・八	六六・四
	……	……
	……	……
	……	……
	一三三・〇	一三五・七
	……	一三三・八
	……	……

第三表

主要國輸出貿易指數表		
佛 國	獨 逸	昭 和 五 年
一三八・七七	一八五・六四	昭 和 六 年
九八・五六	一五〇・八六	昭 和 七 年
六三・七二	九四・三二	

盟國の國際的立場

二

昭和七、八兩年一月—十月間 主要國輸出貿易額表		第四表				
		米國	英國	伊國	蘇國	日本
昭和七年		九二・四三	七四・三九	一〇九・二一	五〇三・五二	一〇一・五二
昭和八年		五八・一三	五〇・七二	九〇・五一	三九四・一三	七九・三二
差引増(減)		三九・五五	四七・五九	六一・二七	二七三・九六	九六・七八
考備		大正十二年をノーマルとし一〇〇とす				

三

米 國 百萬弗	一、三四二	一、二九九	(四三)
英 國 百萬磅	三四四・三	三四四・四	〇・一
佛 國 百萬佛	一六、二六四	一五、一三五	(二、二二九)
獨 國 百萬碼	四、七七三	四、〇五五	(七一八)
日 本 百萬圓	一、〇八五	一、五二五	四四〇

貿易絶對額に於て日本は尙ほ未だ英、米、獨、佛等に及ばざること遠しと雖も、相對的には昭和七、八年に於て列強に比して大に飛躍を示し(第三、第四表参照)日本の貿易金額は左表に見る如く昭和七、八年に於て急速なる増大を爲し、殊に昭和八年に於ける飛躍は著しい。

第五表

一月—十一月外國貿易表(千圓)

昭和	輸 出	輸 入
三 年	一、七九八、〇八五	一、九九三、四三三
四 年	一、〇八九、三〇七	二、〇五七、二三〇
五 年	一、三五三、八四三	一、四四七、三三三
六 年	一、〇六四、二一一	一、一二四、〇三七
七 年	一、二三七、二七九	一、二七〇、七七三
八 年	一、六八八、八二三	一、七三一、九二〇

必然の結果として最近日本貿易の世界各方面市場進出は誠に恐るべきものがある。即ち第六表の通りである。

0531

035

第六表

日本輸出貿易海外市場進出表(單位百萬圓)

	昭和八年	昭和七年	昭和六年
ア シ ア	七五四・九	五二一・二	四四九・七
滿 洲	六九・七	三・四	
關 東 州	一七九・六	九三・四	五四・九
中 華 民 國	八八・八	一一八・七	一四六・七
香 港	一八・五	一三・二	三四・六
英 領 印 度	一六九・六	一五五・二	九三・〇
海 峽 殖 民 地	三五・七	一八・四	一七・三

國際的立場

一五

南 米 洲	中 米 洲	カ ナ ダ	合 衆 國	北 米 洲	歐 洲	「シ ヤ ム」	「フ イ ツ ピ ン」	露 領「ア シ ア」	佛 領 印 度 支 那	蘭 領 印 度
二 三 ・ 八	一 二 ・ 五	五 ・ 〇	四 二 五 ・ 五	四 三 〇 ・ 九	一 三 九 ・ 五	一 四 ・ 七	一 七 ・ 六	一 一 ・ 九	二 ・ 七	一 二 一 ・ 九
九 ・ 七	三 ・ 七	七 ・ 〇	三 四 二 ・ 八	三 五 〇 ・ 一	九 七 ・ 九	五 ・ 七	一 四 ・ 九	一 一 ・ 二	一 ・ 六	七 〇 ・ 二
九 ・ 〇	二 ・ 八	一 一 ・ 二	三 五 三 ・ 七	三 六 五 ・ 三	八 六 ・ 四	四 ・ 一	一 八 ・ 六	一 四 ・ 五	一 ・ 四	五 三 ・ 五

一六

「アフリカ洲」	一〇八・七	六五・〇	五一・二
「エジプト」	四四・一	三二・三	一九・五
南阿	二一・五	一二・〇	一七・二
大洋洲	五四・七	三七・五	二二・三
濠洲	四二・八	二九・四	二五・四

以上の外、貿易外國際貸借收支に於て、日本は特に最近惠まれたる關係にあり就中海運界は誠に有利なる立場に於て活躍を見せて居る。(昭和七年度貿易外國際貸借受取勘定七六八百萬圓、仕拂勘定七五三百萬圓、差引受取超過一五百萬圓、昭和七年度入超五八百萬圓以上差引仕拂超過四三百萬圓前年度二九〇百萬圓、前々年度一八〇百萬圓) 本平洋時代が日本を主役とするのであらうことが、かくして經濟界方面に於ても推斷せられるのである。

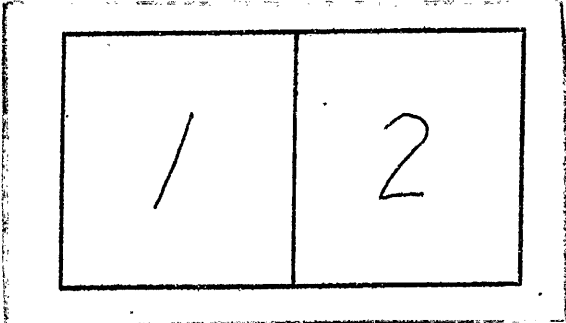

祖國の國際的立場

0534

以上の如き皇國の經濟的發展は、滿洲事變直後一時失ひたる列強の經濟信用を逐次回復して、外貨公債も亦其の相場を持ち直して來た。即ち第七表の通りである。

二八

分割撮影ターゲット

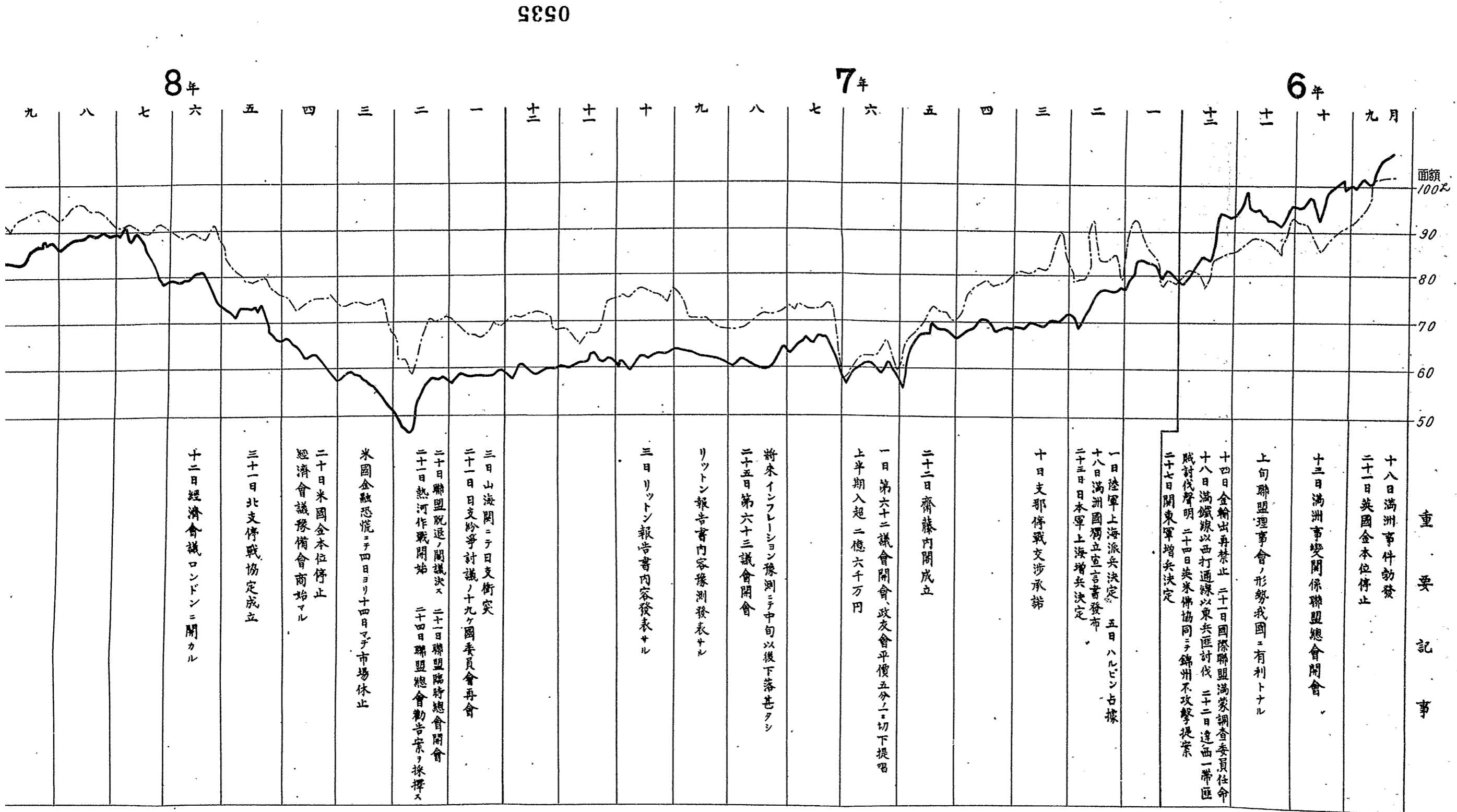
分割した 部分の撮 影 順 序	
分割撮影 した 理 由	A 3判以上のため
<p>上記のとおり分割撮影したことを 証明する</p> <p>6年 11月 9日</p> <p>主務者又は</p> <p>撮影立会者 加部東 保夫 </p>	

第七表

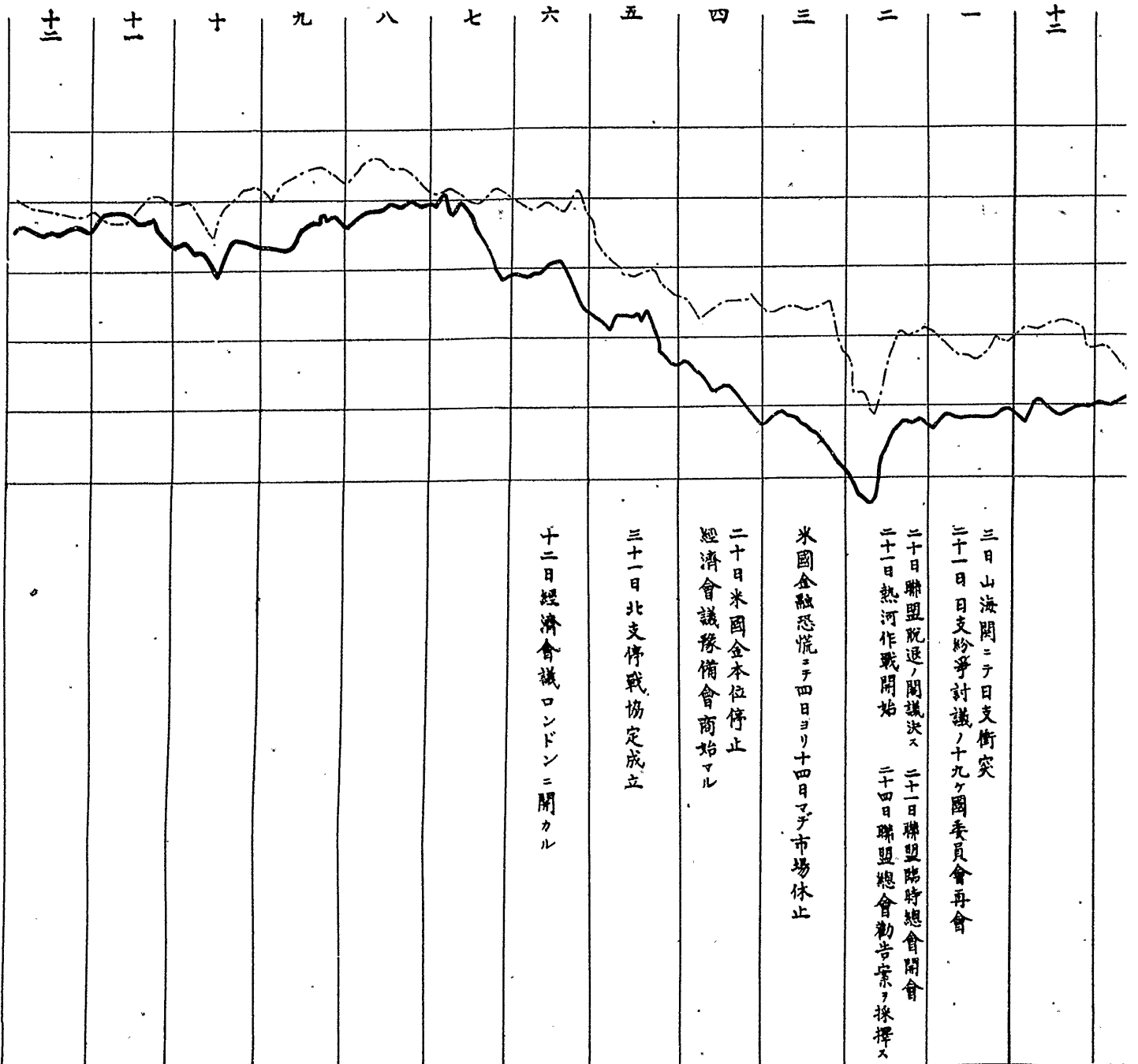
自昭和六年九月至同八年十二月 外貨公債海外市場騰落圖

六分半利米貨公債(証券市場)
六分利英貨公債(ロンドン市場)

重 要 記 事



8年



斯くの如き日本の經濟的飛躍に對して、列國が最近血眼になつて關稅の増壁を高め、其の他國防、政略等各種對抗策を講じて日本を抑壓せんとしつゝあることは誠に必然の勢と云はねばならない。

壯年日本に對する試練

滿洲事變以來政略的にも國防的にも、而して又經濟的にも、前述の如く一大飛躍を見せて、茲に名實共に東亞の盟主たんとする日本が、やがて太平洋新時代の主導的立場を獲得せんことに對して、列強は露骨に強硬なる反對抗争を續けて來た。

此の抗争は事變勃發初當より各種の動きとなつて現はれ、日本は孤立よく奮闘を續けて來たのであるが、今や日本は是等列強の經濟的武力的而して政略的包圍攻勢を受けやうとして居るのである。危険は刻々に日本の前途に近づいて來る。世に謂ふ所の一九三五—六年（昭和十、十一年）の國防危機線に於て、此の危険は相當の切迫を告ぐるものと見なければならぬ。

是れ新興日本に對する列強の必然的なる抑壓であつて、決して、軍備擴張競争からのみ來る危険たるに止まないのである。即ち、伸び行く國家、榮えゆく民族として、敢て之を迎へ、勇躍之を乗り切らなければならぬ所の一大試練であるのだ。日本が能く此の試練を克服し得るや否やは、やがて日本が太平洋時代の主導者として世界の聖義軸心に立つて之を調和輪轉せしめ得るや否やの決する所である。世界歴史の切換へは日本が此の大試練を見ん事乗り越えたる曉に於て始めて完了するであらう。日本は現下、此の天來の一大試練を前にする猛練習の時期に立つて居るのである。

隣邦の政策

隣邦の政策に就ては、從來屢、吾人の報道した所で今更めて之を詳説するを要しないと思ふ。茲に單に要項のみを擧ぐることにする。

蘇聯邦

最近に於ける蘇聯邦の外交政略は實に讚嘆に値するものがある。彼は先きに於ける

ン、バルシヤ、トルコの南隣諸國と不侵略條約を締結し次いで一昨年波蘭、ラトヴィヤ、エストニア、フィンランド等の西方諸隣邦とも夫々不侵略條約を締結し又昨春右不侵略の定義に關する補備協定を確約した際、ベッサラビヤ歸趨問題の爲未だ蘇聯邦との不侵略條約を結ぶに至つてないルーマニアをも此の協定に参加せしめ、茲にルーマニアとの國交恢復の氣運を獲ち得るに至り小「アンタント」の二國又之に倣ひ最近に於ては小「アンタント」國と蘇邦との感情緩和の結果引いて小「アンタント」國と親蘇國の一たる土耳其との接近となり最近ユーゴスラヴィア及ルーマニアの國王又は外相の土耳其訪問となり夫々友好條約を締結するに至つて、蘇邦は今や南方竝に西方諸隣邦との間に少くも有力なる精神的安全保障感を獲得することゝなつた。

西境及南境に安全感を獲得した蘇聯邦は更に進んで東方に於ては米國と握手した。最近米蘇國交の恢復は世間周知の事であるが之により蘇邦は單に經濟上のみならず政略上竝に國防上に於ても多大の好影響を得ることゝなつた。かくして蘇聯邦

祖國の國際的立場

三一

は愈々、彼等の傳統的標語の如く「極東に於て其の運命を決せん」と欲し、極東に對して大いに積極的歩武を進めて來た。即ち、極東の軍備を充實し、五ヶ年計畫の實行によつて國防力の東進を計り、軍需工業の中心を西伯利亞に確立し、ザバイカル、ウスリー鐵道を複線としバイカル湖迂回鐵道を建設せんとし、又、浦鹽要塞を改築し、且つ赤軍除隊兵の極東移住を強制し、極東露領の住民に對し今後數年間免稅を斷行する等、宛然ロシアの重點を西方より東方に移動するの概がある。斯くの如くして一昨年末首相モローロトフ報告演說中に曰はく「ウラルルクズネツ」の偉觀は蘇邦政策の凱旋門とも言ふべく、瘦瘠にして文化に遅れたるウラル地方は、世界の第一級工業地帯と化し不毛にして流謫の地たる西伯利亞亦一大工業地たるに至れり」と。

今や北滿國境をめぐつて蘇聯邦の極東に持つ兵力は、步騎兵十一師團、兵數約十二萬、飛行機四百機戰車少くも三百臺、別に國境附近にグベウ部隊五―六聯隊、コルホーズ師團二―三師團、其の兵約三萬と稱せられる。之を我が在滿兵力約三師團

半に比べると大約三倍以上の優勢を示して居り、又浦鹽には既に十五隻の潜水艦進水を了し、更に目下二十五隻内外を建造又は組立中と稱せられて居る。

他方、蘇聯邦赤化の魔手は今や支那の西境より其の中部に伸び、現在蒙古は殆んど蘇邦の屬地たる觀を呈し、賓哈爾、新疆又將に其の跡を追はんとするの形勢に在り更に廣東及中支の一半又全く共匪の跳梁する所となり四川も亦昨冬來共產軍の侵す所となつた。

翻つて蘇聯邦の國內的勢力を見るに、資本主義列強の努力が、其の經濟機構上より來る各種の拘束と行き詰りとに禍せられて、渺々しき發展を見せあらざるに反し、蘇邦のそれは徹底せる計畫經濟の力行によつて、著しき飛躍を示して居る。之れ破壊の次に來る建設の必然的歸結とは云へ大に注意を要する事である。

例へば第一表に就て列強工業生産の指數を見るも、一九三二年、一九三三年に於て獨、佛、英、米、日等何れも其の生産は一九二八年に比し萎縮低下を見せあるに反し

て獨り蘇邦のみは殆んど二倍以上の飛躍を示して居るのである。

又蘇邦當局の發表する所によれば一九三二年末即ち第一次五ヶ年計畫の末期に於て、蘇聯邦工業生産は全工業生産品の綜合に於て、全世界の第二位、歐洲の第一位に飛躍したとの事である。

蘇邦の斯くの如き飛躍は國防兵備の充實に於て特に甚しい。例へば第八表に就て見ても一九三一年より一九三三年に亙り飛行機數に在りては、日本は全く増加を示しあらざるに反し、蘇聯邦に於ては八〇〇機の増加を現はし、又、戦車に在りては、日本が僅かに約二〇臺の増加を示したるに對して、蘇邦は實に一、三五〇臺以上の増加を見せて居る。かくして蘇邦、今や其外形的陸軍兵力に於ては世界第一位、其の空中兵力に於ても一應は世界第二位を占むるに至つたのである。

固よりかゝる飛躍の反面には、蘇邦國民大衆經濟生活の極度の窮迫を見逃すことが出来ず、其の生活の慘狀に至りては誠に想像の外であつて、ポーランドより國境を越えて

ロシアに入り、滿洲里に於て再び國境を越ゆる迄、何十萬と云ふロシア人を見るも、各驛頭にも、モスコの市中にも、一人の笑ひ顔を發見することが出來ない位である。彼等は笑ふにも笑へないのである。今やロシアは笑ひを知らざる國として悲惨なる生活のどん底に營々努力第二次五ヶ年計畫を戰時同様の意氣を以て遂行突進しつゝある。之れ蓋し人間を機械視する唯物思想及之に立脚する革命政權の必然的運命であるだらう。

獨逸國防軍一將校は昨年十月其の國防雜誌上に日露の關係を論じ、結論して曰はく

「ロシアは好機を失せず對日戰爭を開始するを有利とする。ロシアの西隣ポーランドとは握手が出來た。ポーランドの母國であるフランスと日本との間は、近來精神的にも政略的にも悪くなつた。ロシアと米國とも握手した。支那の大半もロシアの味方である。日露事を構へるとき、米支はロシアの胸算する所たり得る

祖國の國際的立場

第八表
 日本國民たるもの自ら内に省みる所なくして可ならんやである。
 のである」と。

列強陸軍主要兵器並兵員比較表

國別 年次	飛行機(キ)		戰車(臺)		火炮(門)		機關銃(挺)		兵員(人)	
	一九三二	一九三三	一九三二	一九三三	一九三二	一九三三	一九三二	一九三三	一九三二	一九三三
佛	二八〇〇	三,〇〇〇	三,五〇〇	一,五〇〇 豫備多數	六,三〇〇	……	四,五〇〇	……	六二〇,〇〇〇	五五〇,〇〇〇
露	一,七〇〇	二,五〇〇	三〇〇	一,六〇〇 以上	三,〇〇〇	……	三,〇〇〇	……	一,〇〇〇,〇〇〇	一,〇〇〇,〇〇〇
米	三,一〇〇	一,八〇〇	三,一〇〇	五〇〇	四,〇一〇	……	三,〇〇〇	……	三,一〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇
英	二,〇〇〇	一,五〇〇	英〇 總數百臺	二〇〇 百臺	一,五〇〇	……	一,四〇〇	……	二,六〇〇,〇〇〇	三,〇〇〇,〇〇〇
伊	一,五〇〇	一,五〇〇	一五〇	二〇〇	三,〇〇〇	……	一六,〇〇〇	……	三,五〇〇,〇〇〇	三,五〇〇,〇〇〇

米國

備考	スライプ	獨逸	日本	オエック	波
一九三二年の分は獨逸フオン、エルツェン氏著書による。一九三三年の分は陸軍省の調査とす	四五〇	ナシ	一、〇〇〇	六〇〇	一、〇〇〇
	五〇	ナシ	四〇〇	一〇〇	三三〇
	二、〇〇〇	二八八	約六〇	一、一〇〇	五、三三六
	八七五	一九三六	二、〇〇〇	二、〇〇〇	三、三〇〇
	二、八〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	一、五〇〇	三、六〇〇
	二、八〇〇	三、〇〇〇	三、〇〇〇	一、五〇〇	三、六〇〇

米國が滿洲事變勃發以前より日本の大陸政策に對して事毎に反對防害を加へて來た事は、彼が其の米大陸に於てモンロー主義を奉じ乍ら、亞細亞に對しては、門戸開放機會均等を要望するを以て根本方針となせるに鑑み、當然の態度であるとは云へ、

米國の國際的立場

滿洲事變勃發後、米國の對日態度は極度に露骨となり峻烈となつた。日米戦争の不可避説が今や世界人の通り言葉となつたかの如く感ぜられる。

先に其の主力艦隊を太平洋上に移駐して日本を囂喝した米國は、次で大海軍擴張計畫を立案して來らんとする海軍條約改訂問題に備へ、以て日本の海軍比率改訂要望を抑壓せんとし、又、滿洲國の承認に就ても依然として之を認めざるの氣勢を示して居る。最近日本商品の飛躍に對しては、固より堅く其の墻壁を高めて之に當らんとし、加之、支那大陸に對しては各種の國防的政略的經濟的進出により以て將來に備へんとして居る。

例へば支那の中央空軍に對しては自國の人員器材を入れて米國勢力を確立し、支那は三五〇機を目標とする中央空軍擴張用の新鋭機は悉く米國機を以て之に充てんとし、又揚子江口附近には飛行根據地を設定し、中國航空公司を通して、上海―北平、上海―漢口―重慶の航空路を收め、上海、香港、マニラ、桑港等の連絡をも完成せ

んとして居る。

右の外、米支無線通信權を獲得し而して無線電話機買込の契約を爲し、又、別に廣東方面にも手を入れ殊に臺灣の對岸福建省に於ても利權の獲得、軍需品の賣込、軍事根據地の占領等に奔走して居るとの噂がある。果して然りとすれば之れ明かに皇國に對して海陸兩方面より其の威力を集注するの用意を進めつゝあるのではないか。

英 國

英國が其の替て受けたる日本の厚誼を無視して、近時事毎に日本の政策に對抗し、日本を抑壓せんとする態度は、日本朝野の憤る所となり、皇國內一部方面には早くも日英間の危機近迫が告げられて日本の言論機關に親米抗英政策すらが論議せられて居ることは世間周知の事實である。獨逸海軍大佐ストロス氏、其の著「日本に對する強盜遠征」に於て述べて云ふ「今や英國艦隊は米國大艦隊の一支隊となつた」と。日

祖國の國際的立場

米事を構へるとき、英國亦吾等の敵ならずと何人か斷言し得るであらうか、之れ日本の十二分に覺悟しなければならぬ所である。突如として爲された日印通商條約の破棄も、シムラ會商の結了によつて、曲りなりにも落ちつく所を見たとは云へ、日本の各方面に於ける經濟進出と全面的に衝突の運命に在る英國が、他日日本に對して如何なる態度に出づるか、吾人の十分に警戒を要する所であるだらう。殊に英國が、十九世紀以來策動を繼續して來た西藏方面に對する英國の進出は近來甚しく露骨となり、今や常備義勇軍九萬を算し、大西藏國建設を中外に聲明するに至つて居ることは、ロシヤが支那の西部を侵しつゝあること、相俟つて特に東亞の平和上著目すべき所である。

支那

支那は依然として長期抗日を續けて居る。昨年七月乃至九月に實施した廬山會議に於ては、蔣介石と宋子文とが軍事方面と財政方面とを一元的に統制しつゝ、對日國

策を根本的に確立した。即ち蒋介石獨裁下の軍人委員會の権限を擴大し、三年計畫を以て國防力の充實を期し、蒋介石直轄の陸軍兵力現在約三十師團を六十五師團に増加し、空軍として飛行機千五百臺を新に整備し、藍衣社を軍隊化し、之を全國に普及する爲め青年工作を擴大せんとし又、外交方面に於ては三年間抗日策の緩和に依り、以て日本の壓迫より離脱すると共に他面國際聯盟其の他の諸國に依存して日本を壓迫し、同時に其等の援助によりて國力の充實を圖り、是等と相應じて經濟方面に於ては各國毎の個別主義により借款を計り又、經濟建設を實行して時代の要求に應せんとするのであつて將來若し其の實行努力にして相當の見るべきものあらば支那亦決して侮り難きものがあるであらう。殊に彼が米英の支援によりて大いに空軍の充實、商業用航空路の開発に力を注ぎつゝあることは我が國防上大いに著目を要する所である。

危機迫る

祖國の國際的立場

三一

之を要するに皇國の隣邦は今や陸に海に而して空に、銳意國際的危機に應ずるの準備を進めつゝあり。其の狀恰かも皇國に對し共同の包圍圈を形成し壓縮し來るの觀がある。之に對して天壤無窮の皇運を確信する神國日本國民たるもの固より神系を過敏にして焦慮煩悶するを要せざるも、亦決して油斷怠慢を許さない。明年三月には國際聯盟脱退の效力發生し、南洋諸島の委任統治等に就ても一應は問題となるであらう。固より今や聯盟は日本に棄てられ、獨逸を失ひて、歐洲聯盟たるの價値すら有せず將に類死の狀態に在るのであつて、日本たるもの之が脱退效力發生期に際するも敢て之を意に介するの要なしと雖も、爾他國際問題と相錯綜して又皇國に對し面白からざる空氣醸成の一要因たるべきは今より覺悟を堅め置くを要する事柄である。

又同年には華府及倫敦條約改訂問題が持ち上る。此改訂會議に於て我が國が其の初志を貫徹する爲には國民舉つて今日より十分の健闘を覺悟しなければならぬ。固より本會議決裂するも、列國の海軍が一九二一年華盛頓會議以前の自由建艦競争時代に戻る迄の

話であつて之によつて直ちに戦争の勃發を見るとは限らないのであるが、而も、相當な白熱的場面を演出すべく其際吾れに待つあるを頼むの決意と準備となくば、勢の窮する處如何なる局面の發展し來るやも圖かられない。即ち此時機に於て、有利なる海軍比率の力を頼んで、米英若し我れに向つて不當の抑壓を加へんとするに於ては、皇國は時に臨んで堂々と決するの十分なる用意を進め眞に鐵石の決意を以て之を乗り切るに非ずんば危機を解消することは至難であらう。而かも時偶、蘇聯邦第二次五年計畫の成果を擧げて、極東に對して積極的攻勢を企圖する時機であり、一步を誤らんか支那亦其の三年間の雌伏を終つて積極抗日に立上るの時であることを何人が否定することが出來やうか。

如斯觀じ來る時危機は刻々に日本の前途に迫りつゝあるのである。唯之を未然に解消し戦はずして之を乗り切るの方法は、一に國民與國の意氣燃ゆる以外に之を求むることとは出來ない。

國民的結束強化の切要

三四

翻つて日本の現情を思へば、國防危機線を目指す眞劍の努力に於て尙ほ幾多の餘地が残されて居る。

滿洲國建設に對する皇國の努力は誠に飛躍的であつて、滿洲國は今や帝制を布き、日露戰後二十九年滿蒙は平和の輝きに満ちて來た。世界の樂土として、やがて此地が大陸に於ける皇道の源泉となることも程遠いことあるまい。然し乍ら滿洲の開發の爲め世に謂ふ所の日滿經濟の統制を行ふにしても、先づ日本夫れ自體の經濟統制を如何様にするかと云ふ根本問題が決定せられることが先決條件であつて、之無くしては、滿洲今後の建設も、必然に行き詰るのではあるまいか。

又、武力軍備の充實だけから見ても、日本は尙ほ幾多の努力すべきものを有するのであるが、之を近代の國防から見ると、思想政略、經濟戰と如何に統制運用するかの準備に關しても、尙一層の眞劍を以て根本的に之を研究大成する必要があらう。

之を國家總動員的に表現すれば戰時に對する戦力の統制に關しても、精神動員、人員動員、産業動員、貿易統制、金融統制、其他各方面の努力を要すること。吾人の先に報道せる通りである。殊に現在日本の有つ社會不安を一掃して、全國民を擧げて同心一體となり國際的危機に善處することを要するのである。之れが爲めには九千萬の皇國臣民が皇運扶翼の一念に燃えつゝよく自己を内省し全體と部分との相關關係に立つて自己の天職に邁進する外はないのである。徒らなる小我に捕はれ人を貶し他を罵るが如きは斷じて不可である。吾れ以外の善なるもの正しきもの清きものに對する自己滅却の忠義心を國家を救ふ唯一途である。皇國は今や正に新なる歴史の歩みに入つた。過去を清算して將來に結束を固むるは今明日の急務であるだらう。此結束の上に舉國的總動員を圖らんか皇國の前途誠に洋々たるものあるを信じて疑はないのである。